

『両性具有 溺愛エンドレス～猫コスで甘く発情して～』

著：秀 香穂里

ill：いけや

「んー、どっちにしようかな……」

青と赤のマグカップを持って、伏埜彰仁は首を傾げる。青は彼の気性のまっすぐさを表しているようだし、赤は情熱を表している。どっちにしよう。どうしよう。彼——御堂龍一への誕生日プレゼント選びは、もう一時間以上経っていた。最初は夏らしくポロシャツを贈ろうかと考え、次は龍一が好みそうなロックCDを贈ろうかと考え、いいやせっかくだから意表を突いてサボテンを贈るのもいいかなと迷い、そしていまは表参道のセレクトショップでカップ選びに散々頭を悩ませていた。

高校三年生の龍一とは三つ違い。大学生の彰仁は、龍一の家庭教師として毎週彼の家を訪ねている。龍一は、男くさい風貌に逞しい肢体をしている。学生服を着ていても、龍一の胸が厚いことがわかるくらいだ。切れ長の目の鋭さに最初の頃は内心怖じ気づいていたけれど、さまざまなステップと一緒に踏んで仲が深まったいま、龍一がにこりと笑うと案外可愛いことを発見した。

「——うん、もう少し他にも見よう」

迷ったまま買っても後悔してしまう。だったら、たくさん見て回ったほうがいい。今日は土曜日で一日空いている。

表参道から離れて、たまには池袋や新宿に行ってみよう。ここは洒落ているものが多いけれど、龍一のハートを掴むなにかを探すなら、もっと賑やかな町のほうがいい。

電車に乗って、まずは池袋で降りた。東口から、サンシャインシティに向かっていく。途中、ちょっと喉が渴いたので、目についたロッテリアに寄ることにした。

チキンナゲットとポテトフライ、コーラを注文して、窓際の椅子に腰掛ける。ナゲットを頬張っていると、かたわらに置いていたスマホが振動する。見ると、龍一からSNSのメッセージが届いていた。

『今日の夜、よかったら一緒にメシ食わねえ？ 親はふたりだけで旅行なんだ。兄貴も出かけてるし』

もちろんOKだ。そこまでにプレゼントを決めて、直接渡したい。

『お誘いありがとう。それじゃ、六時頃におうちに行くよ。なにが食べたいか決めておいて』

デートの誘いにも近いものだから、知らず知らずのうちに微笑んでしまう。返信を送ると、すぐに龍一からメッセージが飛んできた。

『あんたが食べたい』

「……もう」

裏表のない龍一の求め方はまぶしくて、強い。

まっすぐな愛情と欲望を向けられて、ノーと答えられる奴がいたらお目にかかりたいものだ。「なるほど。我が弟はあなたを食べたくて仕方がないと。まったく、これだから現役高校生は」  
「……っ、章吾さん！」

背後から影が落ちたかと思ったら低い声が響いてきて、慌てて振り返った。

肩のラインが美しい明るいグレイのスーツを身に着け、少し皮肉交じりな笑みを浮かべながらトレイを持つのは、龍一の兄、章吾だ。

以前も、章吾とはこうして偶然ばったり出会ったことがある。

「びっくりした……こんにちは。このへんにはお仕事ですか？」

「ええ。取引先があるんですよ。いまはその帰りで、ちょっと昼飯を食べようかなと」

「でももう二時過ぎですよ。お忙しいんですか」

「ありがたいことにね。夕方になってやっと食べられることもざらなので、今日はまだましなほうですね」

カウンター席に座る彰仁の隣に章吾は腰掛け、早速ハンバーガーをぱくつく。それが、端正な面差しの章吾にしては可愛かったから、彰仁はくすっと笑った。

「ん？」

ハンバーガーを食べながら章吾が振り向く。フレームレスの眼鏡は理知的な彼の美貌を彩るうってつけの小道具だ。

それから、食べかけのハンバーガーを差し向けてきた。食べなさい、とでも言うように。

彰仁は照れながら、そろそろとハンバーガーに口をつけ、嚙り取った。それから急いで咀嚼して飲み込み、「すみません」と謝る。

「僕、食べたそうな顔をしてましたか」

「すごくね。私と目が合った瞬間——飢えた目をしていましたよ」

「っ、そんな……」

うつむく彰仁の頬に、章吾がゆっくりと指を滑らせてくる。

龍一と章吾。野性的な弟と、知性的な兄。ふたりに愛されるようになって、どれぐらい経つだろう。きっかけは龍一の家庭教師として勉強を見ている最中に手を出され、思わず昂ぶってしまったのだけれど、この身体には自分と彼らしか知らない秘密がある。他の誰にも言えない、罪深

くて、甘い秘密。

「——どうしました、アキ」

耳元で囁いてくる章吾が、今度は彰仁の腿に手を置き、つつつ、と人差し指を太腿の内側に這わせてきた。ジーンズ越しでも、その指がいやらしく動くのがわかる。腿の表面をぐるりとなぞり、ジグザグに動いて付け根にたどり着く。そこでしばらく止まってからまた動き、こすこす、とジーンズの股間の縫い目を淫らに擦られて彰仁は目を瞠った。

「だめ、です、ここ……外、……」

「誰も見てませんよ。あなたが声を出さなければ大丈夫。……私は構いませんが、アキの女の子は擦ってほしそうですよ？」

「や、……や、……バカ、もお、章吾さん……っ」

もう食べるどころではない。

カウンターに突っ伏して快感に耐える彰仁の隣で、章吾は澄ました顔でもう片方の手を使ってハンバーガーを食べている。

「う、……う、いじ、わる……」

涙目で睨んだ。ずるい、こんなふうには火を点けられたら、どうにもならないと知っているくせに。

章吾と龍一、そして自分の三人で分かち合っている秘密。それは、男性として生まれつきたはずの彰仁が、じつは女性としての性器も持ち合わせているということだ。

胸は平ら。男性器としてのやや小ぶりのペニスを持ち上げると、女性器としての慎ましやかな割れ目がある。さらに、その奥に陰囊があり、きゅうっと締まったアナルがある。章吾たちに知られる前は、両親しか知らなかった秘密だ。めったなことでは誕生しない両性具有という身体に生まれついてしまった以上、ひとびとの好奇心な目から隠し通さねばならない。たとえ、どうにかこころを許した相手に打ち明けたとしても、きっと気味悪がられてしまうだろう。物心ついた頃から自虐的な想いを育んできた彰仁は、一生恋なんてできないと信じ込んでいた。

だが、神様はほんとうにいたのかもしれない。

家庭教師先の生徒である龍一だけではなく、その兄の章吾にも深く愛され、不思議な身体についても大切に守られていた。

彼らは、この身体の秘密を知ったとき、確かに驚きはしたけれど、同時に労ってくれた。『大変だったでしょう』と。『愛してやれる場所が増えて嬉しいぐらいだぜ』とも。それがどんなに嬉しかったか。言葉では言い尽くせないから、彰仁は涙を薄く滲ませ、なんとか顔を上げて隣の男を見つめる。くりくりと股間で動く指は布越しにクリトリスを擦り、快感のあまり声を上げてしまいそうだ。

「……可愛い顔をしている。いまにも喘いでしまいそうだ。ここであなたをイカせるのもいいけど……私ばかり先に手を出すことに弟が怒りましてね。まったく子どもはこれだから」

「や、ん、っ、んあ、——あぁっ、だめ、擦っちゃ……や……！」

ちいさな声は、章吾にしか届かない。彼はスマホを耳に当て、どこかに電話をかけているようだ。

「——もしもし、私だ。ちゃんと勉強してるか？」

そう言って章吾は薄笑いを浮かべ、スマホを彰仁の口元にあてがい、もう片方の手で布越しのクリトリスをつまみ上げる。

『もしもし？ おい』

龍一だ。今日は家で勉強をしていたらしい。食事をともにする夜までに課題を終えておいてね、と約束したことを守ってくれたようだ。

「あ……っ！ あ、あ」

『……くそ、また兄貴が手を出してんのかよ。……アキ、いまどこにいる』

「ん、——ん、いけぶくろ、……の、」

なんとか言い終わると、『わかった、兄貴にイカされたりすんなよ』と言い置いて、龍一はぶつりと電話を切った。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>